

大あやむの中曽根、つけ焼刃「余剰人員対策」の

「10万人首切り実力粉碎！」のわがオノ波ストは、敵の心臓を突き刺した。更に強力なオノ2波追撃



85. 12. 19
No. 2121

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五（六）（公衆）〇四七二（二二）七二〇七

政府は、十二月十三日の閣議で、「国・自治体に余剰人員三万人受け入れ」を骨子とする「国鉄余剰人員対策の基本方針」を決定した。内容は、商業新聞に「目標の達成は疑問」と書かれるほど裏付けのない代物である。しかし、国鉄当局は、これを受け、全職員を対象とした進路アンケート調査を開始した。国会で論議すらもされていない段階で、しかも来年の四月から転職開始というように、計画を一年も前だおしし、既成事実を積み重ね、なしくずし的に十万人首切りを強行せんとするやり方を断じて許してはならない。

何の裏づけもない ペテン的アドバルーン

この決定は、全く具体性も裏付けもないものである。国・地方自治体で三万、民間一万、国鉄関連会社で二万など、ようぎょうしくならべているが、

- ① 六一年度は、すでに各省庁とも新採者の内定・決定をしており、採用枠はほぼない。
- ② 自治体は、全国知事会事務総長の「受け入れにはおのずと限界」の発言に見られるように、地方行革でしめつけられ余裕がない。
- ③ 民間会社は円高の中で受け入れは厳しい。
- ④ 関連会社は、玉つき解雇に対し、労働者が猛反対し闘っている（当然だ）これが現実ではないか。どうやって実現するんだ。

「10万人首切り」の事実が白日のもとに

●国鉄ゼネスト反乱の影におびえる中曽根・杉浦・松崎
政府がこのたび、国会における「分割・民営化」の論議も決定もされていないこの時期に、あえて何の裏付けもない「雇用問題」について方針を打ち出さざるをえなかったのは「分割・民営化」が結局首切り問題であることについて、論議がふつとうし、かくしおおせなくなつたこと、従って、雇用問題について何らかの対策を出す以外、反対の声をおさえられないという危機感のあらわれである。

これは、われわれの第一波ストライキにより、全国鉄労働者の怒りの決起がはじまったこと、「分割・民営化」の本質があばきだされ、大論議がまきおこっていることに追いつめられた中曽根の苦しまぎれの対応と言える。

そもそも監理委員長・亀井が「公的部門で三万人受け入れ」と国会答弁したことをもって三万人と言っているが、亀井の言う三万人の内六三〇〇名は自衛隊なのである。よくも平気で言えたものだ。亀井は、労働者をとことんなめ切っているのだ。何が「雇用の確保」だ。自衛隊でもかまわなと言っているのは動労「本部」革マルだけだ。亀井発言は、まさに動労「本部」革マルとの合作である。

「首切り計画」の前だおし実施、
「進路アンケート」許すな

国鉄当局のアンケートは、国鉄からの追い出しのためのものであり、十万人首切りの道を開くものだ。誰が応じられるか。しかも十四日には「希望退職者には割増金を出す」ことを決定するなど、許しがたい攻撃を強めている。自らの責任を回避し、働く意志のある労働者を「余剰人員」と勝手に名づけ、まるで品物のごとく金を少し上のせするからやめろ、来年四月から他の会社に行けなどということをどうして許せるか。われわれは、さらに怒りをこめ、第二波・第三波へつき進もう。